

高嶺の花を護るために

岡本 寛志 (専務理事)

去る 9 月 23 日、東京御茶ノ水でシンポジウム「高山植物—保護と盗掘防止を考える」が開催され、各地から 400 名以上の人々が参集した (プログラムは別項ご参考)。そこでテーマとなったのは高山植物の盗掘と、山のオーバーユース—踏み付けの二つである。

いま山野草栽培は一つのブームで、それが嵩じて珍奇な花を追い求めるマニア達、彼等を当てこんだ悪質な山草業者や手先、その筋の盗掘プロが全国に横行している。高山のみならず、高原・低山や森林に出没する心なき人々は、少しでも美しい花を着ける、あらゆる山野草を根こそぎ大量に掘り採ってゆく。そのため大多数のラン科植物、高山植物は絶滅危惧種としてレッドリストに載ってしまうという異常事態だ。しかも彼らはウの目タカ目の目で「珍品」の生育地を探し出す。植物の本・雑誌・図鑑から、地図・学術誌・論文などあらゆる情報源が漁られている。そのために、いまや詳細な植生図の作成や、論文での植生調査表の発表ですらばかれるという、学術上由々しい問題ともなってきた。

野の花は、その場所にあってこそ美しいという単純な事柄が、私有地だろうが国有林だろうが、花を採るということが「盗み」という犯罪行為だという自明の理が、何故人々に徹底されないのだろうか。昔から、野に花を摘み、山に紅葉を狩るということが風流事だったからというのは、もはやいいわけに過ぎない。種の多様性の保全、学術研究の正確性の保持のためには、シンポジウムに集まったような、心ある登山家や保護活動家、レンジャーなど一部の篤志家だけで護ろうとしても、とても護り切れるものではない。

もう一つの問題、山のオーバーユース—登山者の激増、それに繰返される学校生徒の集団登山、団体登山が、山の生態系を著しく破壊させている。不心得なアマチュア・カメラマンも花を踏み荒らす。あまつさえ、天然記念物に指定されている貴重な山を、何故わざわざ選んで、高体の登山競技を行うのだろうか。またそれがどうして静観されているのだろうか。

いま山野の生態系が著しく急速に破壊されつつある現実を直視して、多くの関係者が協力して護る手立てを総合的に考える時期にきているのではないか。先のシンポジウムが一つのきっかけとなることを望むのである。



平成10年度助成事業報告

平成10年度当基金の助成総額	3,067万円		
(財)日本自然保護協会との共同事業による公募助成	20件	2,097万円	
(財)世界自然保護基金日本委員会の事業助成	1件	200万円	
(財)日本自然保護協会の事業助成	1件	200万円	
その他の助成	4件	570万円	

が決定、今年より平成11年にかけて助成。(内容は以下に紹介)

平成10年度当基金の助成内容

- (財)世界自然保護基金日本委員会の独自事業助成
 - ・白保サンゴ礁保全にかかわる諸活動 助成額：200万円
白保サンゴ礁のモニタリング調査、サンゴ礁保護研究センター準備室の運営について助成
- (財)日本自然保護協会の独自事業助成
 - ・自然観察指導員の養成 助成額：200万円
同協会自然観察指導員講習会のプログラムの見直し検討と講習会開催についての助成
- 極東ロシア森林ホットスポット・プロジェクト(継続第4年度) 地球の友ジャパン
助成額：250万円
サハリン州シュミット半島の保護区設定に資する活動、自然調査に対し助成
- 北方四島の自然の写真展開催 北方四島自然問題協議会
助成額：50万円
返還問題とからんで日ロ共同経済活動が合意されるなど、北方四島の貴重な自然が脅やかされる状況になって来た。その優れた自然を紹介し、保護を訴えるための写真展開催を計画する地元根室の団体に助成
(創立5周年記念事業)
- 長良川河口堰モニタリング調査報告書の作成 長良川河口堰モニタリング調査グループ
助成額：70万円
5年間にわたったモニタリング調査の総決算としての報告書作成に対して助成
- シンポジウム「絶滅から救おう高山植物―保護と盗掘防止を考える」の開催
(社)日本山岳会自然保護委員会・北海道高山植物盗掘防止ネットワーク
助成額：200万円
危機状態にある高山植物の現状を訴え、保護の方策を考える全国規模のシンポジウム開催を全面的に助成

○プロ・ナトゥーラ・ファンド（第9期）助成先一覧
 （当基金と（財）日本自然保護協会との共同事業による助成）

国内調査研究助成

単位：千円

No.	研究テーマ	助成先	代表者	助成額
1	「緑の回廊評価」に関する研究 ーフクロウを事例としてー	ワイルドライフハビタット 機構	樋口亜紀（新潟大）	1,500
2	上高地における地形形成と地下水流動、植生動態に関する研究	上高地自然史研究会	島津 弘（立正大）	1,130
3	本州産クマガラの繁殖期における行動圏調査及びその生態調査	本州産クマガラ研究会	藤井忠志	700
4 継続	日本産ジュゴンの現状と保護	ジュゴン研究会	粕谷俊雄（三重大）	2,000
5	ハナノキ集団保護のための遺伝的多様性の評価と生息域外保存技術の開発	ハナノキ保護研究グループ	半田孝俊 （林木育種センター）	800
6	糞分析によるエゾシカの越冬期における食性評価	道東エゾシカ研究グループ	北原理作（北海道大）	600
7	種子島のメヒルギ群落の現状とその保全に係わる調査研究	種子島のマングロープを守る会	小滝一夫	1,100
8	テレメトリー調査による出水平野の越冬ツル類の生息場所利用	鹿児島県ツル研究会	塩谷克典（鹿児島県環境技術協会）	1,000
9	海上の森地域における生態学的研究 ー特に地質・地形・土壌と植生についてー	海上の森生態研究会の会	波田善夫（岡山理科大）	1,300
10	危機に瀕する屋久島の海岸部植生の生態学的調査とその保全	屋久島動植物友の会	岩川文寛	1,000
合 計				11,130

国内活動助成

No.	研究テーマ	助成先	代表者	助成額
1	中海本庄工区の種多様性に関する印刷物作成とその普及	汽水域研究グループ	國井秀伸（島根大）	660
2	熱帯林保全のための環境教育プログラム開発	ボルネオ熱帯林生態研究会	武生雅明 （科学技術振興事業団）	1,600
3	市民参加による河川水質一斉観測事業	日本陸水学会東海支部 河川水質一斉観測事業実行委員会	八木明彦 （名古屋女子大）	720
4	吉野川における市民調査を基礎とする環境調査と公開プログラミングづくり	吉野川環境ネットワーク	石井愷義（徳島大）	1,300
5	2005年国際博覧会予定地「海上の森」環境診断マップ作成	ものみ山自然観察会	曾我部行子	400
6	東北地方におけるニホンザルとその生息地の保全のためのパンフレットの製作	東北ニホンザルの会	伊沢絃生（宮城教育大）	1,000
7	生態系保全のための「河北潟」自然公園計画案の作成	河北潟湖沼研究所生物委員会	高橋 久	700
合 計				6,380

海外調査研究助成

No.	研究テーマ	所属機関	代表者・（）内推薦者	助成額
1 継続	カムチャッカ半島と日本の間の鳥類の渡り解明 ー保護のための基礎的研究ー	カムチャッカ生態研究所 （ロシア）	Yuri Gerasimov （ユリ・ゲラシモフ） （尾崎清明・山階鳥研）	1,120
2	アムール地方のコウノトリ保護	アムール社会生態学連合 （ロシア）	Yuri Darnan（ユリ・ダナン） （古賀公也・阿寒国際ツルセンター）	1,340
3 継続	ズグロカモメの生態学的研究	遼寧省林業庁 （中国）	邱 英杰（Qiu Ying Jie） （山岸 哲・京都大）	1,000
合 計				3,460

助成金総額	20件	20,970
-------	-----	--------

サハリン北端のシュミット半島の東海岸には長さ 20km を超える超塩基性岩地があります。昨年私は食虫植物研究会のメンバーとともにここを訪れ、日本のコウシンソウに近縁と考えられる *Pinguicula sopathulata* (マルバムシトリスミレ) を探索し、高山植生の群落調査を行う機会がありました。その時にはヘリコプターで3カ所に着陸し短時間調査を行っただけでした。今回はシュミット半島全体の調査の一環として、もっと広い範囲を時間をかけて歩こうというものです。メンバーは1996年調査と同じく、サビロフ博士夫妻と猟師兼山案内のワシリー、それに私の4名で、お互い気心がしれています、しかしシュミット半島には道路が乏しく、ヘリのチャーター費が高騰して利用できないので、最初と最後にヒッチハイク的に車を利用する他はすべて徒歩ということになりました。

7月18日朝ユジノサハリンスクからの夜行列車で終点ノグリキに着き、直ちにバスで4時間かけてオハに向かい、サビロフ夫妻とおちあつて、夕刻トラックで東海岸を北に向かいます。車道はオハ北方の海岸に出たところで終わり、あとは海岸の波打ち際を強引に走ります。大部分は砂浜ですが、大きな礫の浜も車高を利して強引に突破します。日も暮れかかるところ、浜は狭くなって車はこれ以上進めなくなります。2週間分の食料・テントその他すべてを背負って海岸線を更に北に向かいます。歩きにくい丸い礫の浜が多く、やがて日が暮れて薄明かりの中をあるくこと8kmにしてようやくボリショイロングリの河口に着きます。ここには猟師兼漁師のピョートルの小屋があり、ここが調査のベースになります。朝起きて見ると1kmほど北に蛇紋岩山地(オルリナヤ山系と呼んでおきます)が見え、海岸の礫はすべて蛇紋岩です。また河口はカラフトマスでいっぱい、当然あたりはヒグマがいっぱいです。最初の日はこの小屋からオルリナヤ山地南端部を調査しました。海拔10mほどのところからチョウノスケソウがあらわれ、崩壊地にはリシリヒナゲシに似た黄色いケシが沢山咲いています。海拔200mほどの尾根筋は全く高山的でチョウノスケソウ、カラフトミヤマノエンドウなどがモザイク状に生えています。

翌日また荷物を背負って海岸線を北に向かいます。蛇紋岩は風化が激しく、海岸線は比高100m内外の風化した蛇紋岩砂礫の急な崩壊斜面で、草1本生えていません。所々崩壊斜面の途中から水が湧き出ています。冷たく美味しいのですが重金属イオンが含まれているはずで飲用不可と考えられますが、ほかに飲める水もなくつい飲んでしまいます。8kmほど北上したところにソ連時代の軍の施設跡があり、沢には昔のサウナ小屋が残っています。この小屋を根城に数日間あたりを調査し、また荷物をもってさらに北上し、オルリナヤ河口の流氷観測所跡(火事で全焼したという)にテントを張り調査をしました。ここからはオルリナヤ山地の最高点であるオルリナヤ山(463m)とその北方の山城を調査しました。帰りはオルリナヤ山地の主稜線を辿って2日かかってピョートルの小屋に戻りました。

オルリナヤ山地ではハイマツは凹地などに限られ、高山的なわい性低木や地衣類などの群落が広く見られ、その種類相はサハリン中部東海岸の川島山のそれに似ています。しかしカラフトヒメウスユキソウ(新称)やフロヨディカルプス(セリ科)などサハリンではシュミット半島のみに見られる植物などもあります。全体に日本の早池峰山やアポイ岳を巨大にしたような特殊な山城です。

さてピョートルの小屋からの帰り道は、シュミット半島を半分ほど横断して、半島中部にある道路に出なければなりません。14kmほどをわずかな踏み跡を頼りに背丈を越す高茎草原、ミズゴケ湿原、グイマツの疎林、エゾマツの林を交互に抜け、丸1日かかって道路にたどり着いたときは全員すっかり消耗しておりました。翌日はシュミット半島最高峰のトリ・ブラータ山(3人姉妹の意)の一角(最高点は623m)にの

ほりましたが、この山は礫岩の山で、海拔 400mほどから上は一面のハイマツでオルリナヤ山地とは全く異なった植生です。この山から見るシュミット半島は人手の入った様子が見えず、グイマツ、エゾマツの林が一面に広がっています。オルリナヤ山地の特殊な植生、広大な原生林と併せてシュミット半島は原生自然環境保全地域とすべき場所であると強く感じました。



①

① オルリナヤ山地の海岸に行く



②

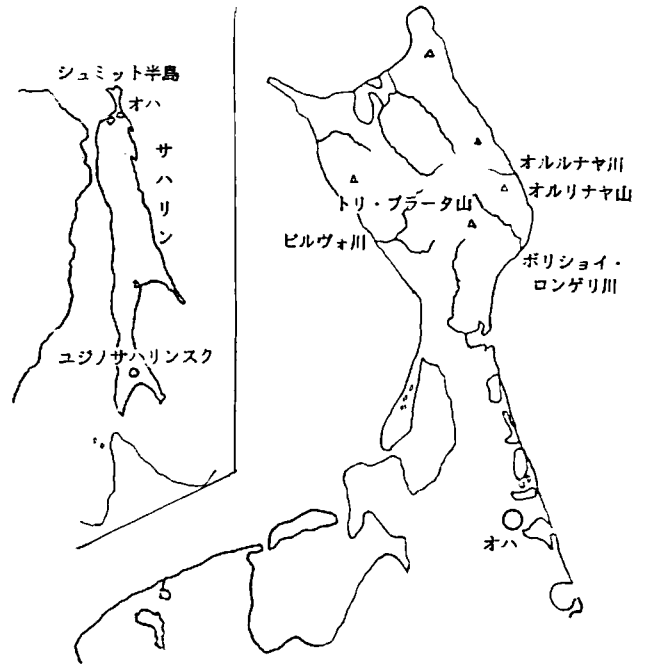
② オルリナヤの海岸段丘



③

③ シュミット半島最高峰トリ・ブラータ山の原生林

シュミット半島



◎パンフレット「高山の植物を絶滅から救おう」の刊行

A4版 8ページ、カラー写真

解説：大場達之（当基金理事）

写真：三宅 修（当基金評議員）ほか

シンポジウムの開催に合わせて、高山植物の保護を訴えるパンフレット1万部を作成配布中である。

高山植物の保護に関するセミナー、集会等のテキストとして、1件100部まで無料配布（送料は自己負担）。

詳しくは事務局まで。

高山の植物を絶滅から救おう



サハリン最北端シュミット半島での森林調査

沖津 進 (千葉大学園芸学部)

1998年6月30日から7月10日まで、サハリン最北端のシュミット半島における自然環境を調査した。メンバーは日本側から藤裕蔵教授(帯広畜産大学)および小生、ロシア側からはサビロフ博士(ロシア科学アカデミー海洋地質、地球物理学研究所島嶼生態学問題研究室)と夫人のナーシャ博士、さらに、通訳兼ガイドのバシーリ氏の計5名である。目的は、「極東ロシアの森林ホット・スポット・プロジェクト」の一つ、「サハリン州シュミット半島の自然調査」で、シュミット半島には優れた自然が残されている可能性が高いので、その実態を詳しく調査し、後の自然保護区設定の基礎資料を得ることである。シュミット半島の自然や植生に関するまとまった報告はロシアでも出版されておらず、自然全般についての具体的な情報が望まれている地域である。藤巻教授は鳥類、サビロフ夫妻は植生全般にわたって精力的に調査され、小生は森林構造を手がけた。以下に、その結果を概説しよう。

シュミット半島の自然環境

シュミット半島はサハリン最北端(54°20'N, 142°30'E)に位置し、オホーツク海に対して北-北西方向に約100km突き出ている。地形はなだらかな丘陵地-山地からなり、最高点は標高623m(プラト山)である。半島の東と西にそれぞれ標高300-500m程度の山地が北西-南東方向に並走し、半島中央部には両山地に挟まれた、起伏の緩い台地が広がる。

植生は単調で、川沿いの低湿地や台地の凹地にはグイマツ-ハイマツ林が分布し、台地の斜面から凸地、山地にかけてはエゾマツ林が分布する。トドマツは分布するものの極めてわずかで、我々は目撃しなかった。落葉広葉樹林は川沿いのドロノキ-ヤナギ林が主なもので、ケヤマハンノキ、ミヤマハンノキやダケカンバは分布量が少ない。グイマツ林内にはしばしばハイマツ低木林が分布し、グイマツ-ハイマツ林となっている。林内にはハイマツの他に低木性の *Betula middendorffii* が分布する。共に陽樹性が極めて高いが、林冠が疎開しているために分布出来るのであろう。

平坦地形やわずかな凹地形にはマーリと呼ばれる湿原がみられる。マーリの周囲には、乾燥傾度に応じてサイズの異なるグイマツが分布している。

エゾマツ林の構造

エゾマツ林とグイマツ林それぞれ3ヶ所づつ調査した。グイマツ林についてはとりまとめが進んでいないので、エゾマツ林について述べる。

エゾマツ林では構成樹種の大部分がエゾマツで、他にはダケカンバ小-中径木(胸高直径30cm以下)がごくわずかに混生するのみである。グイマツは混生しない。量的構成をみると、最大胸高直径60cm、最大樹高24m、胸高断面積合計33-55 m²/haで、分布限界付近に成立しているわりにはよく発達している。エゾマツの直径分布は逆J型を示し、更新がスムーズに行われている。分布限界に位置する割にはよく発達した林分を維持し、安定林分の形となっている。

エゾマツの樹形は縦長で、必要最小限の樹冠がろうそくのように幹に付いている状態である。気候が冷涼なため枝を広げる余裕がないためと考えられる。冷涼な気候環境下でこうした樹形が維持されるためには、光が樹冠の下まで十分当たることが必要である。樹冠面積が狭いことでこの条件を満たしている。そのために、エゾマツの樹高生長は極めて緩慢で、樹高20mに達するのに200年以上を要する。

シュミット半島のエゾマツは、厳しい気候条件と小さな樹冠面積のため生長が極めて緩慢であるが、生存可能な個体は最低限の生長を確保している。さらに、縦長の樹冠を維持し林床にまで光が届くが、競合樹種を維持している。

おわりに

以上のように、シュミット半島のエゾマツ林は大変デリケートな条件の下に安定林を維持している。山火事や伐採などでひとたび破壊されると再生は困難である。自然保護区を設定するなどして、慎重に保護される必要がある。

1998年6月下旬から7月上旬にかけて、サハリンの最北部、シュミット半島で鳥類の調査を行った。この調査は「極東ロシアの森林ホット・スポット・プロジェクト」の一環として行われたものである。サハリンでの鳥類調査は今回が3回目である。1回目は、1994年に自然保護助成基金の助成によるサハリンの自然環境調査の一環として行ったもので、北緯50度以南の森林、草原、河川、湖沼などいろいろの環境の12か所で調査することができた。2回目は1995年の5月である。このときは、自然保護助成基金の助成によって作成した野鳥保護を訴える絵はがきの配布が目的であったが、そのついでに南部で渡り途中のオオハクチョウを調査をした。北緯50度を越えたのは今回が初めてである。

ユジノ-サハリンスクからシュミット半島までは約800km、それほどの距離ではないが、調査地に入るまでは2日がかかりである。まず、ユジノ-サハリンスクからノグリキまでは列車、夜行で15時間かかった。次にノグリキからオハまでは路線バスで4時間、オハから調査地までは「ウラル」という6輪駆動のトラックで2~3時間である。

最初に入った所は、北緯54度付近のピルヴォ川中流部である。このあたりは森林で、地形にはあまり起伏がなく、標高差にして100m以内である。川沿いはヤナギ類、ドロノキ、ハンノキなどからなる落葉広葉樹林の河畔林である。それに続いてグイマツ林となり、標高の高いところはエゾマツ林となっている。森林はこの三つのタイプに代表され、そのほかに「マーリ」といわれる湿原がある。

鳥の調査では、早朝5時(日本時間の3時)から林内の道路をゆっくり歩きながら、出現する鳥を記録していく。調査してみて意外だったのは、種類相が南部に比べて非常に単純なことである。たとえば、グイマツ林とエゾマツ林ではルリビタキとカラフトムシクイの2種が主要な種で、それにときどき他の鳥が加わるくらいである。これに対し、河畔林ではコアカゲラ、ミソサザイ、シマゴマ、ノゴマ、メボソムシクイ、アオジなど種類数は比較的多かった。グイマツ林やエゾマツ林から河畔林に入ると、鳥の種類相ががらりと変わり、そのはっきりした変化はいままで他の地域では経験したことがないほど見事であった。

われわれの調査隊は5人で、ロシア側からは植物学者のサビロフ博士夫妻、日本側からは私と千葉大学の沖津さん、それにガイド兼通訳のミハリオフさんである。ピルヴォ川沿いの開けた所でキャンプをしたが、キャンプ期間中ミハリオフさんがずっと炊事をしてくれた。野外調査での食べ物は、保存や運搬の関係で限られてしまうが、調査の中ごろからはカラフトマスが遡上し始め、これが食卓を豊にしてくれた。食事以外で、キャンプ生活での関心事といえば、ヒグマの存在である。このあたりにはヒグマがかなりいるようで、テントから100mも離れていない道路には毎日新しい足跡と糞が見られた。滞在期間中一度もヒグマに出会うことはなかったが、多分クマの方で人間を避けていたのだろう。

最初の計画では3か所で調査をする予定であったが、地震で海岸沿いの道路が壊れていたなどの理由で、残念ながら1か所でしか調査ができなかった。

サハリンの鳥類については、すでに生物学・土壌学研究所(ウラジオストク)のV.A.ネチャエフ博士により「サハリンの鳥類」として詳しい著書が出版されており、どのような鳥類が生息しているかは明らかにされている。しかし、森林とか草原とかそれぞれ異なる環境で、種類構成がどのようになっているかを明らかにしたような論文はない。今回、シュミット半島で調査をしてみて、森林のタイプにより鳥の種類構成が見事に違うことがわかった。このような環境ごとの鳥の生息状況は、ネチャエフ博士の本を読んでも浮かび上がってこない。「百聞は一見にしかず」という。今回の調査でも、実際に自分の眼で見ることの重要性を再認識した次第である。

平成 9年度決算ならびに平成10年度予算

当基金では平成10年5月18日に第11回理事・評議員会を開催し、平成 9年度の事業報告、決算報告及び平成10年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は下表の通りです。

平成 9年度決算ならびに平成10年度予算

(単位：千円)

項 目	平成 9年度		平成10年度
	予 算	決 算	予 算
(収入の部)			
基本財産運用収入	53,500	52,459	51,700
運用財産収入等	100	1,473	30
前期繰越金	7,911	7,911	9,278
収入合計	61,511	61,843	61,008
(支出の部)			
事業費	36,000	34,794	34,560
活動助成	(7,000)	(3,340)	(11,560)
調査研究助成	(17,000)	(18,200)	(12,000)
海外調査研究助成	(10,000)	(11,900)	(9,000)
事業管理費	(2,000)	(1,354)	(2,000)
管理費等	19,600	17,771	18,400
次期繰越金	5,911	9,278	8,048
支出合計	61,511	61,843	61,008

シンポジウム「絶滅から救おう高山植物—保護と盗掘防止を考える」の開催

主催：(社) 日本山岳会自然保護委員会・北海道高山植物盗掘防止ネットワーク

去る 9 月 23 日、東京御茶ノ水・全電通ホールにおいて、当基金の協賛助成、環境庁、林野庁、文化庁をはじめ多数の自然保護団体、山岳団体の後援により全国各地から 4 1 0 名が参加して開催された。

東京学芸大学小泉武栄教授司会により、日本山岳会斎藤惇生会長、堂本暁子参議院議員の挨拶、北大小野有五教授、当基金大場達之理事の講演、夕張岳、アポイ岳、早池峰山、北岳、白馬岳の 5 か所からの現地報告と、後援 3 官庁の担当官、日本高山植物保護協会白旗史朗副会長、弁護士籠橋隆明氏を交えての熱のこもったパネルディスカッションが行われ、最後に保護を訴えるアピールを採択。閉会後は参加者による懇親会も行われた。

編集後記

歳の瀬も近づき皆様お忙しくお過ごしのことと存じます。今年は当基金にとって大変盛り多い年でした。先ずサハリン・シュミット半島での森林、植生、鳥類の貴重な調査研究が記事をお読みいただければお分かりのように、3 先生によってなされたこと、それから基金設立 5 周年の行事として「高山植物の保護」に関するシンポジウムに協賛助成できたことです。これは予想以上の出席者で埋まり、私共のささやかな努力が少しでも自然界の為に役に立っているのではないかと嬉しく、今後も頑張るこの運動をより大きく盛り上げていかなければと心から感じました。20 世紀最後の年である 2000 年も 2 年後に迫っています。21 世紀にこの世界をより良い状態で引き継げるよう一人一人が一生懸命に力を合せ協力していこうではありませんか。(岡本 和子記)

☆当基金も E-mail を導入致しました。

アドレスは

pro-natura@muj.biglobe.ne.jp

Pro Natura ニュース第 8 号

発行者：財団法人 自然保護助成基金

発行年月日：平成 10 年 12 月 8 日

〒150-0046

東京都渋谷区松濤 1-25-8

松濤7カズ 2階

TEL:03-5454-1789 FAX:03-5454-2838